

“土佐産” 弥生後期土器の近畿初見例をめぐる検討

秋山浩三・河村恵理

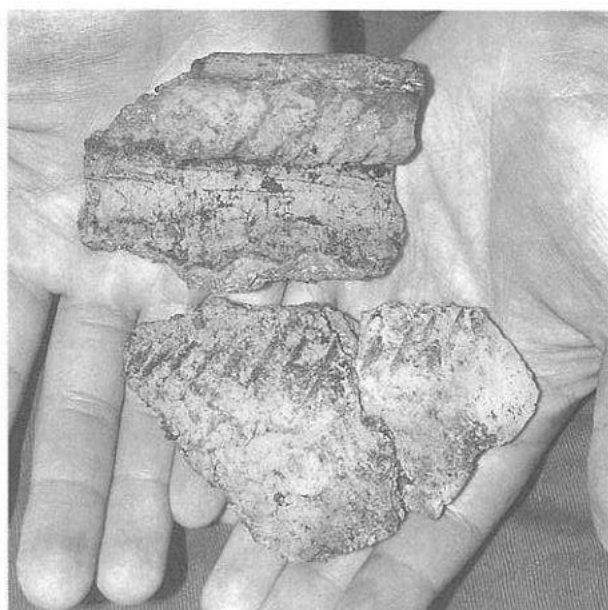
1. はじめに

今回、瓜生堂遺跡99-6区の第18面関係層順から、弥生後期前半の多くの土器群とともに、明らかに近畿一帯の資料とは異なる胎土・色調・形態の特徴を備える2個体の土器が出土した(写真15)。外面に煤が厚く付着していることもあって漆黒状を呈し、それ故に煮沸用器種とは推測できた。が、破片で検出した際には、近畿通有の甕とは形態的に大きくへだたり文様等も異彩を放ち、一種“グロテスク”な印象を与えていた。類例に接したことがなかったので、“東国からの搬入品かな”と、まったく根拠なく調査担当者間で話題にし注意を払っていた。弥生土器に造詣ふかい同僚等にも質問してみたが、何故かしら多くは同様に“東の土器ちゃうか”と、これまた理由なき無責任な言葉を発するだけで、これらの故事来歴は一切判然としないままであった。

そんな折り、かつて当センター専門調査員として筆者(秋山)と総持寺遺跡の調査等にあたり、現在は高知県で職を得て活躍中の久家隆芳君が来阪し、「南四国西半部の弥生土器」という論文(久家2002)の抜刷を謹呈してくれた。拝受直後は雑事に翻弄されページもめくれなかったが、後に拝見すると、何と上記の“グロテスク”土器の類例図が多く掲載されている。さっそく、くだんの土器実測図を彼に送付し意見を聞いたところ、ほぼ確実に高知県(土佐)産土器というお墨付きをもらった。しかも、遠隔地の近畿で“土佐産”弥生後期土器が確認されたのはこれまで絶無で、きわめて重要な発見と彼も驚愕した。この時期前後では、四国の讃岐(香川)産や阿波(徳島)産土器が近畿へ搬入された例の認識はあるが、土佐産はまぎれもなく初見であろう。



個体A



個体B

写真15 近畿初見例となった瓜生堂99-6区出土の“土佐産”弥生後期土器

そこで、これらの考古学上の意義を検討するため、標記2名で関連資料等の調査を計画した。また、四国関係者に問い合わせをするとともに、久家君にも再来阪の際に実見してもらい、さらに筆者も高知に赴き在地品を拝見し比較検討をおこなった。本稿では、それら作業で認識できた内容を備忘録として記載しておくことにしたい。以下では、まず、瓜生堂遺跡の“土佐産”弥生後期土器の特徴をあらためて確認する。そして、在地四国における関連土器の概要をまとめることを経て、今回例と類似する土器資料の集成をおこなう。これらの作業に基づき、現地での実見結果等とあわせて、瓜生堂例の位置づけを試みることにする。

2. 瓜生堂遺跡例の概要

まず、本遺跡“土佐産”土器の2個体(A・B)について、その詳細な特徴を観察する(写真15、図441、および本書図232、写真図版97・98参照)。

個体A(本書報告No5288)は、全容が判明する貴重例である。口縁部形態をみると、外面に幅約2.6cmの粘土帯を貼付けた粘土貼付口縁をもつ。粘土帯外面にはナデののちヘラ状工具による列点文を施し、粘土帯に比較的膨らみをもつ。体部形態は、体上位の肩部に最大径があり、胴部から外反して立ちあがる口頸部をもつ。外面調整は、工具によるナデを施し、胴部下半にはヘラミガキがみられる。肩部には列点文をめぐらす。内面調整は、全体に工具によるナデを施す。遺存状態は比較的よいが、部分的に摩滅が著しいことや、内外面ともに多量の煤等が付着するため、調整が不明瞭な箇所がある。

個体B(本書報告No5289)は、口縁部から頸部付近の破片である。形態をみると、口縁部外面に幅約1.8cmの粘土帯を貼付けた粘土貼付口縁をもつ。粘土帯外面にはヨコナデがみられ、下端部に刻目を施し、粘土帯の膨らみは個体Aに比べて一層顕著である。頸部形態は、胴部から緩やかに外反する。内外面ともに工具によるナデを施し、肩部には列点文をめぐらす。

両個体とも、胎土中に4.5mm大のチャートや2mm大の長石等が多くみられる特徴をもつ。このうちチャート粒は、円磨度がかなり進んだ灰色～暗灰色系のもので、しかもその大きさや多さは比較的顕著な特質となっており、他地域産土器の搬入品であることは胎土の点からも首肯できそうである。

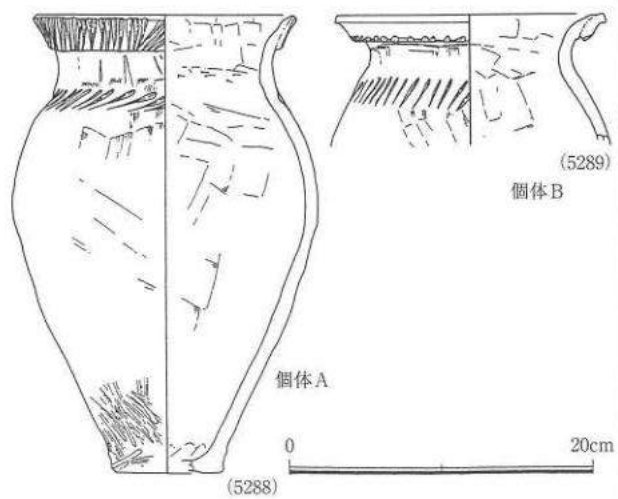
3. 南四国ほかにおける類似資料の概要

上記の瓜生堂例の特徴をふまえ、本項では四国での類似資料の集成をおこない、比較検討を試みたい(表33、図442～445、写真16・17)。

このような特徴を備える土器に関しては、地元高知の出原恵三氏による一連の研究成果に詳しい(出原1990、同2001、同2002、同2003、ほか)。それらによると、口縁部外面に粘土帯を貼付する独特な手法をもつ一群の土器は、研究当初において「土佐型甕」として提唱され、近年では「南四国型土器(甕)」と命名されている。地域的に特色あるこの土器群は、弥生前期末に成立し、中期に盛行をみせ後期前半まで継続するといわれる(後掲図447参照)。

「土佐型甕」や「南四国型土器(甕)」のうち、瓜生堂例の位置づけを試みるための基礎作業として、これらに近似した諸特徴をあわせもった個体の探索を、集成資料の検討をとおして実施した。この作業は主に、本稿末尾に掲げた各関連文献に報告された諸資料を対象とした。

まず、関連品出土が確認できた四国側資料を、分布・立地状況から、①物部川流域以東地域、②同以西地域、③鏡川周辺地域、④仁淀川流域、⑤四万十川流域以南、⑥宇和島地域、⑦松山平野地域という



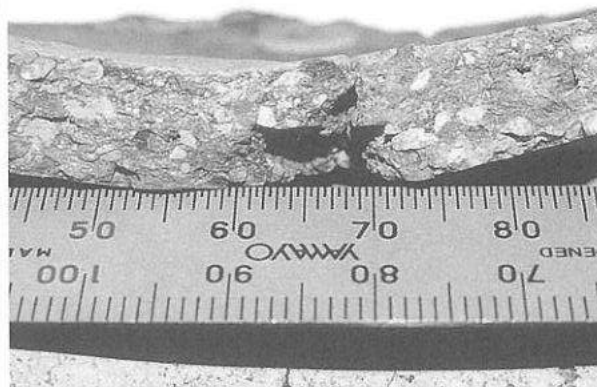
個体A・B実測図



個体B口頸部



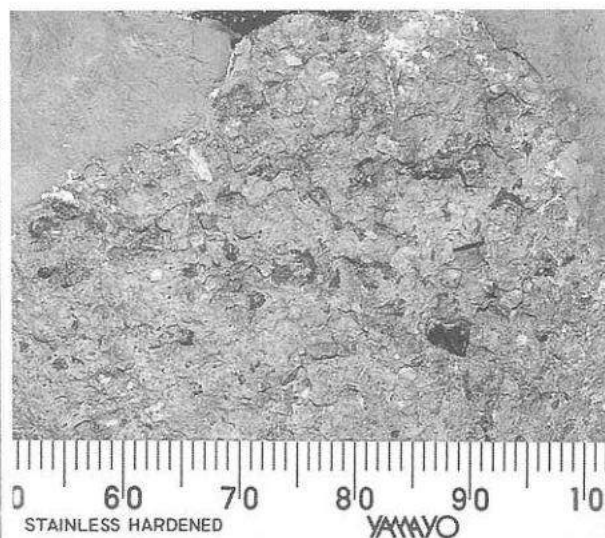
個体A口頸部



個体B胎土



個体A口縁部



個体A胎土

図441 瓜生堂遺跡の“土佐産”弥生後期土器の詳細

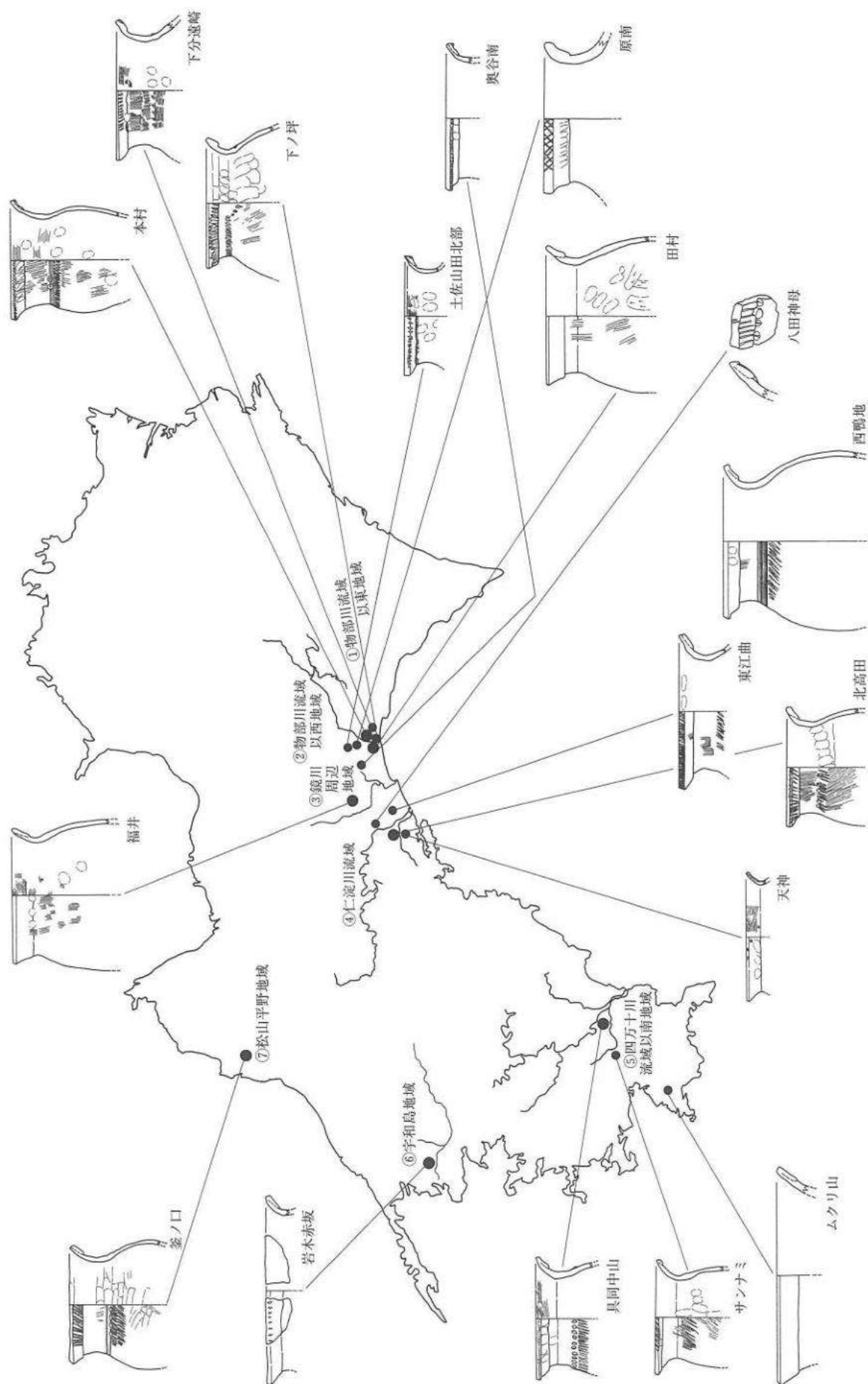


図442 南四国地方ほかにおける類似資料出土遺跡分布

表33 南四国地方ほかにおける類似資料出土遺跡一覧

地域名	遺跡名	所在地	類似資料が出土した遺構とその時期
①物部川流域 以東地域	本村遺跡	高知県香美郡野市町	竪穴住居・土坑(中期後半～後期前半)・ 不明遺構(中期末～後期前半)
	下分遠崎遺跡	高知県香美郡香我美町	土坑(中期Ⅱ期前半)・包含層
	下ノ坪遺跡	高知県香美郡野市町	自然流路
②物部川流域 以西地域	田村遺跡群	高知県南国市	溝(中期中葉)・その他(中期)
	奥谷南遺跡	〃	段状遺構(中期末～後期初頭)
	原南遺跡	高知県香美郡土佐山田町	円形竪穴住居(Ⅳ様式後半)
	稲荷前遺跡	〃	包含層(中期後半末)
	土佐山田北部遺跡群	〃	竪穴住居(中期)
③鏡川周辺地域	福井遺跡	高知県高知市	谷流路(中期後半～後期前半)
④仁淀川流域	八田神母谷遺跡	高知県吾川郡伊野町	包含層(?)
	東江曲遺跡	高知県吾川郡春野町	竪穴住居(後期中葉)
	天神遺跡	高知県土佐市	包含層(後期)
	西鴨地遺跡	〃	包含層(後期前葉)
	北高田遺跡	〃	土坑・ピット・包含層等(後期)
⑤四万十川流域 以南地域	具同中山遺跡群	高知県中村市	土器集中(後期)・その他(後期前葉)
	ムクリ山遺跡	高知県幡多郡大月町	包含層(中期)
	サンナミ遺跡	高知県宿毛市	包含層(中期～後期前葉)
⑥宇和島地域	岩木赤坂遺跡	愛媛県東宇和郡	包含層(中期)
⑦松山平野地域	釜ノ口遺跡	愛媛県松山市	9次SD3(後期中葉)

7 地域(図442)に便宜的に区分する。そして、それぞれの地域における関連資料がみられた遺跡とそれらの土器概要について簡単に解説し、そのうえで各地域の特徴を把握し、瓜生堂例との対比検討の素材とする。

また、各資料の対比上の抽出ポイントとなる諸特徴の記載にあたっては、後項でも紹介する浜田2001における分類基準を援用し、次のようにタイプ分別した表現を用いる¹⁾。

- ・口縁部形態の分類
 - 1：胴部から緩やかに外反する
 - 2：胴部から直立した頸部をもち、口縁部は緩やかに外反する
 - 3：胴部から直立した頸部をもち、口縁部は大きく外反する
- ・粘土貼付口縁部のあり方
 - A：明瞭な段をもつ
 - B：指頭圧痕によって僅かな段を残す
 - C：粘土帯の膨らみのない扁平なもの
 - a：粘土貼付口縁の粘土帯が短いもの
 - b：粘土貼付口縁の粘土帯が長いもの
- ・胎土中におけるチャート等粗粒砂の含有の有無

この基準に準拠すると、瓜生堂例は個体Aが2-B bタイプ、個体Bが1-A aタイプとして分類できることになる。この両タイプまたはそれらに近似する土器の摘出やそれらとの対比を主眼とし、各地

域における土器様相を以下に概観していこう。

①物部川流域以東（香宗川流域）

高知県中央部にある高知平野の東端部を流れる物部川右岸流域に立地する。この地域は弥生時代を中心とする多くの遺跡が確認されている。ここに位置する香我美町・野市町を対象として類似土器の集成をおこなった。その結果、本村遺跡（野市町）、下ノ坪遺跡（同）、下分遠崎遺跡（香我美町）から関連資料が得られた。

本地域内で類似資料が多かった本村遺跡は、野市町の中央部にのびる山地南側の丘陵部に立地する。当遺跡は、弥生中期末から後期前半までに営まれた集落遺跡である。残存率のよい土器を概観すると、瓜生堂個体Aと同じ2-B bタイプは全体の18%の割合であった²⁾。一方、当遺跡で割合が最も高いのは3-B bタイプで36%であった。このタイプは、個体Aと同じ粘土貼付口縁の形態をもつが、口縁部の形態が、直立する頸部から大きく外反する特徴を備える。

下分遠崎遺跡は、山北川と香宗川の間を南西にのびる山地の南端裾部に形成された沖積地に立地する。当遺跡は、弥生前期末から中期前半までに営まれた集落遺跡である。集成した土器を概観すると、本村遺跡と同様、3-B bタイプであった。

下ノ坪遺跡は、物部川左岸の下流域に形成された扇状地に立地する。集成した土器を概観すると、瓜生堂個体Bと同じ1-A aタイプであった。

以上のこと等から、当地域の出土資料をまとめると、瓜生堂近似例は全体の27%であるのに対して、3-B bタイプが45%であった。ここでは、瓜生堂例とまったく同じ特徴を備える土器ではなく、部分的に類似した特徴をもつ土器が大半を占めることが明確である。一方、本稿で集成したなかでは、数少ない1-A aタイプの土器がみられたことは注意される。

②物部川流域以西

高知県中央部にある高知平野の東端部を流れる物部川左岸流域に立地する。この地域にある土佐山田町と南国市におよぶ地域を対象として類似土器の集成をおこなった。その結果、表33に掲げた諸遺跡から次のような関連資料が得られた。この地域は田村遺跡群を主として、弥生中期から後期前半の短い期間に高地性集落が多くみられる。そうした状況のなかで、粘土貼付口縁の土器は田村遺跡群の衰退とともに減少していったと考えられる。

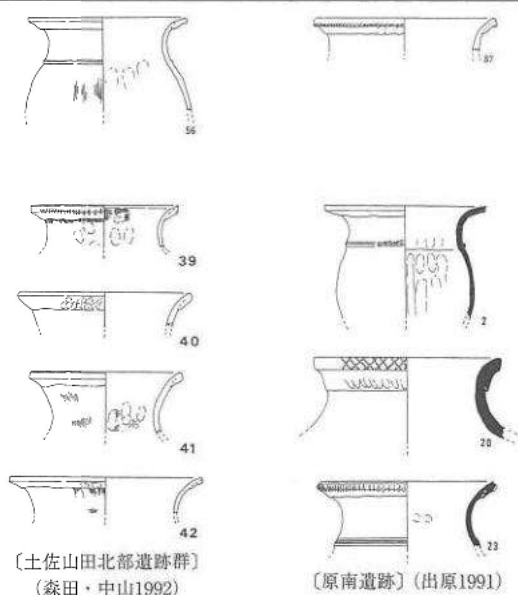
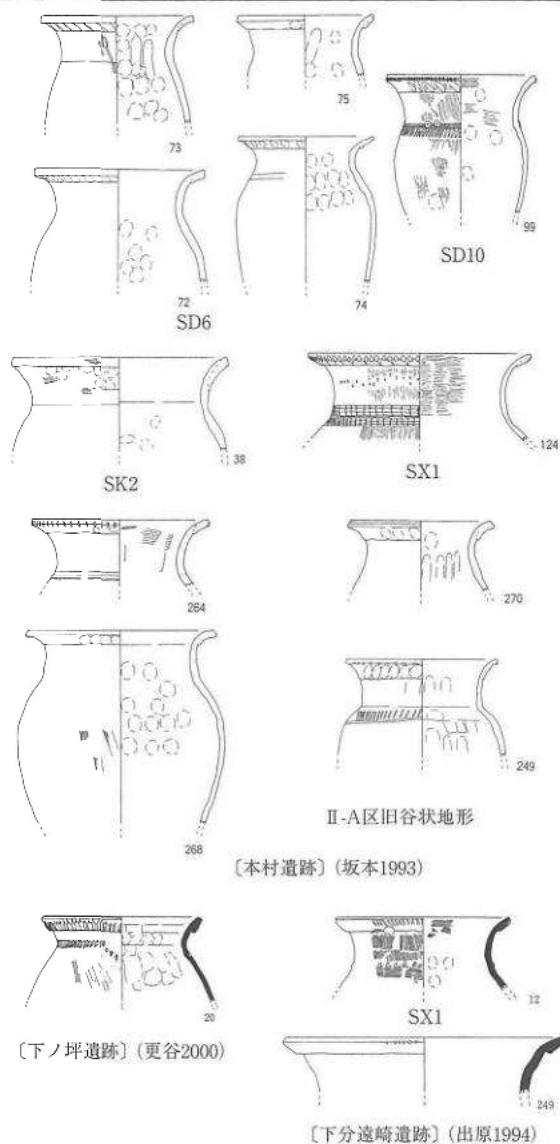
本地域内で類似資料が多かった田村遺跡群は、南四国における弥生時代の拠点集落である。当遺跡の集成した土器で残存率のよい土器を概観すると、瓜生堂個体Aと同じ2-B bタイプはみられなかったが、個体Bの1-A aタイプが全体の8%の割合を占めていた。当遺跡では、他に2-B aタイプや2-C bタイプなどが、それぞれ15%の割合を占める。

原南遺跡と稲荷前遺跡では、3-B aタイプが全体の50%と大きな割合を占める。2-B bタイプも若干ながらみられる。

土佐山田北部遺跡群と奥谷南遺跡から出土した土器は、小片がほとんどで明確なことはいえない。しかし、B bタイプの粘土貼付口縁をもち、口唇部に刻目を施す。そして、胎土にチャートを含む粗粒砂が入ること等から、瓜生堂例と関連する同一系統の土器である可能性が高い。

以上のこと等から、当地域出土の瓜生堂近似例は全体の12%に満たない。このように、ここでは物部川流域以東と同じく、瓜生堂例と同じ形態的特徴をもつのではなく、部分的に類似した特徴をもつ土器が大半を占める。

①物部川流域以東地域



②物部川流域以西地域

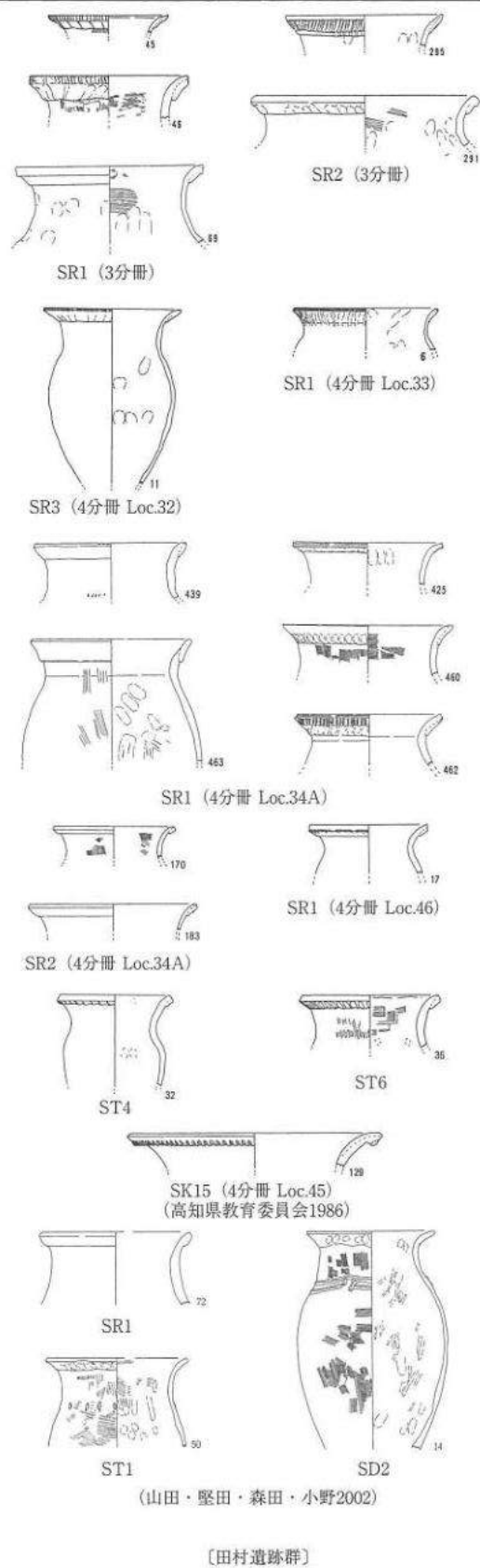


図443 南四国地方ほかにおける類似資料集成図一 1

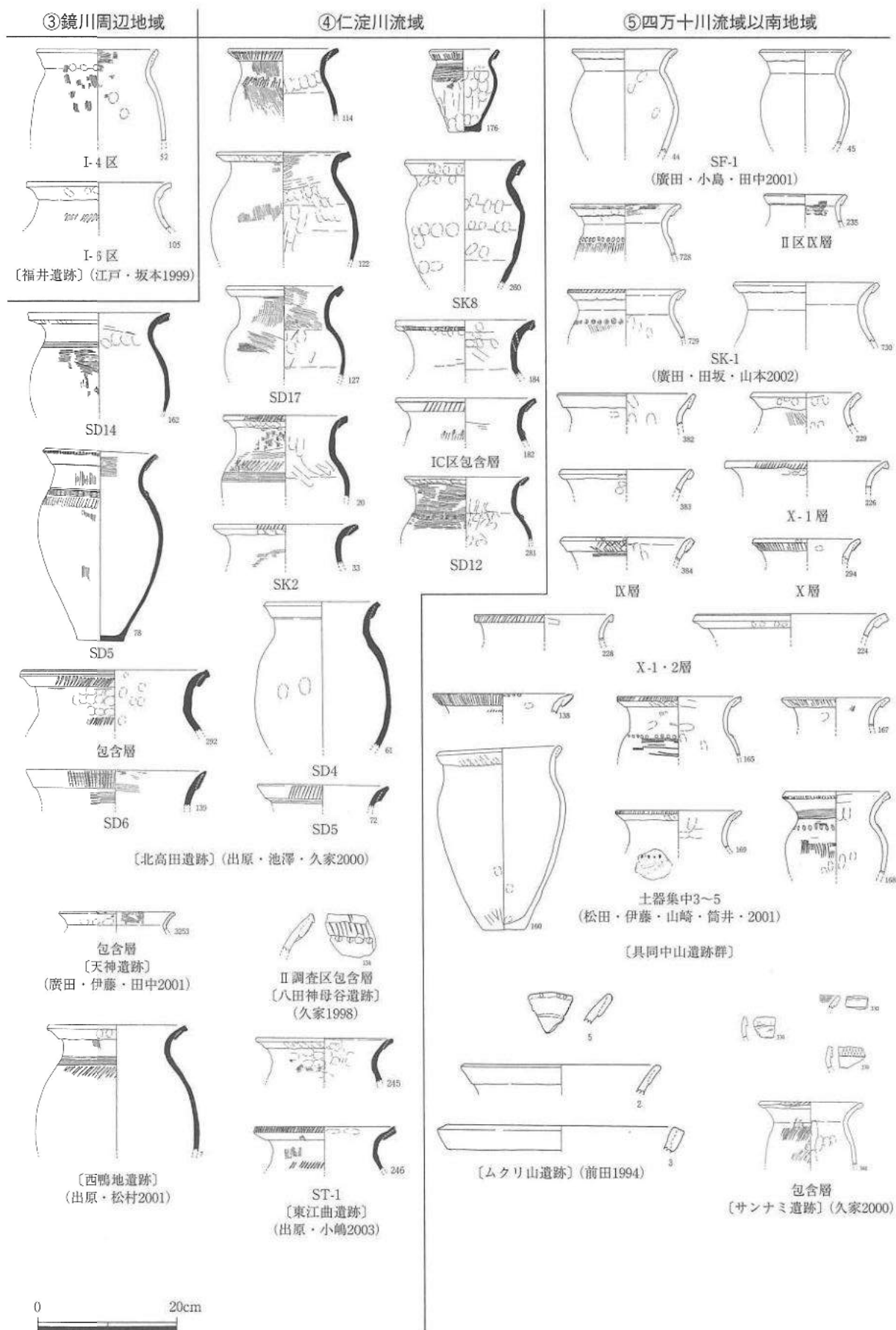


図444 南四国地方ほかにおける類似資料集成図-2

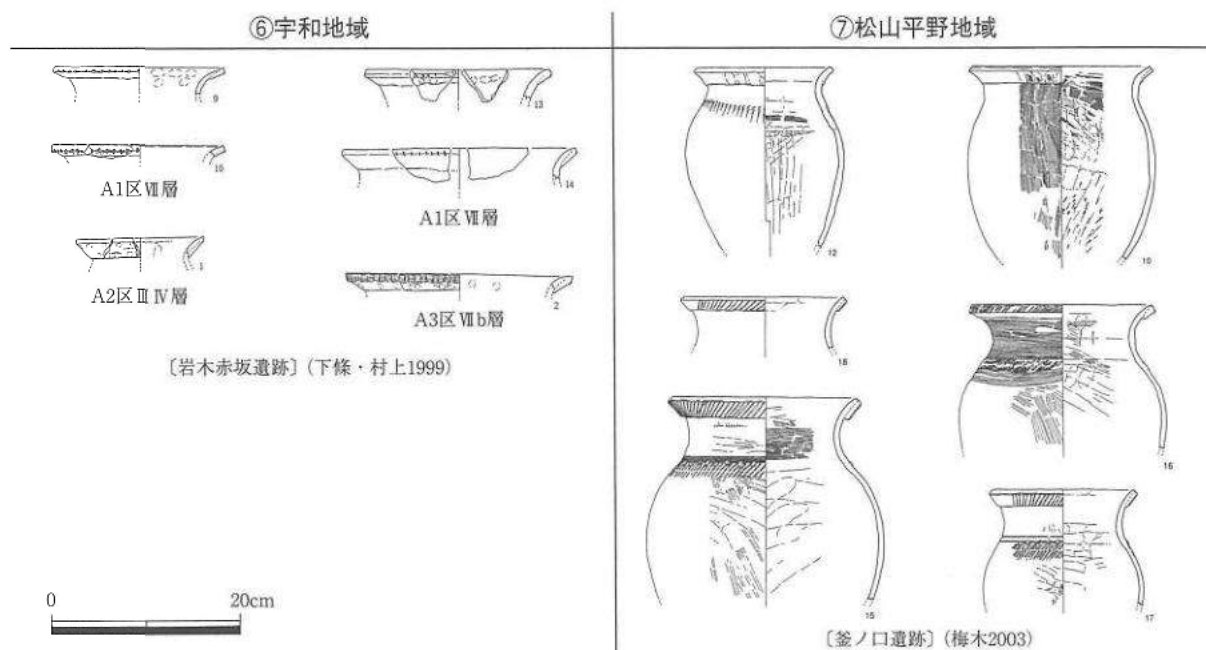


図445 南四国地方ほかにおける類似資料集成図一 3

③鏡川周辺地域

高知県中央部にある高知市に位置し、北部の山地から派生し南部の浦戸湾に注ぐ鏡川の周辺地域に立地する。地形は北部山地・中央低地・南部山地・南部低地に分けられる。地域内の平野部のほとんどは低湿地であり、鏡川の氾濫の影響を受けている。そのためこの地域では、近世以前の遺跡はほとんど検出されていない。ここでは高知市を対象に類似土器の集成をおこなった。その結果、福井遺跡から関連資料が得られた。

福井遺跡は、縄文時代から中世にいたる複合遺跡であり、類似資料の土器は、弥生中期後半から後期前半の谷状の流路等にもともなって出土している。それらは他地域と比較すると少なかったが、瓜生堂个体Aと同じ2-B bタイプの土器があった。他の土器は小片であるため、詳細なことはいえない。

以上のこと等から、類似資料が少ないため正確なことはいえないが、当地域では前述した2地域よりも瓜生堂近似例の出土割合が高い可能性も考えられる。

④仁淀川流域

高知県中央部に流れる仁淀川流域の吾南平野・高東平野に立地する。この地域は弥生～古墳時代の集落遺構が多く確認されている。ここに位置する須崎市・土佐市・伊野町・春野町・高知市におよぶ地域を対象に類似土器の集成をおこなった。その結果、表33に掲げた諸遺跡から次のような関連資料が得られた。

本地域内で類似資料が多かった北高田遺跡は、高知県の中央部に位置し、独立丘陵の西裾部および低湿地に埋没する自然堤防上に立地する。当遺跡は、縄文晩期と弥生後期の遺構・遺物が多く検出され、仁淀川流域では最大級の弥生後期集落であることが周知されている。当遺跡の集成した土器で残存率のよい土器を概観すると、瓜生堂个体Aと同じ2-B bタイプは全体の46%の割合であった。他に1-A bタイプや、2-A aタイプ、3-B bタイプ等がある。

西鴨池遺跡と東江曲遺跡は、瓜生堂个体Aと同じ2-B bタイプが大半であった。他に3-B bタイ

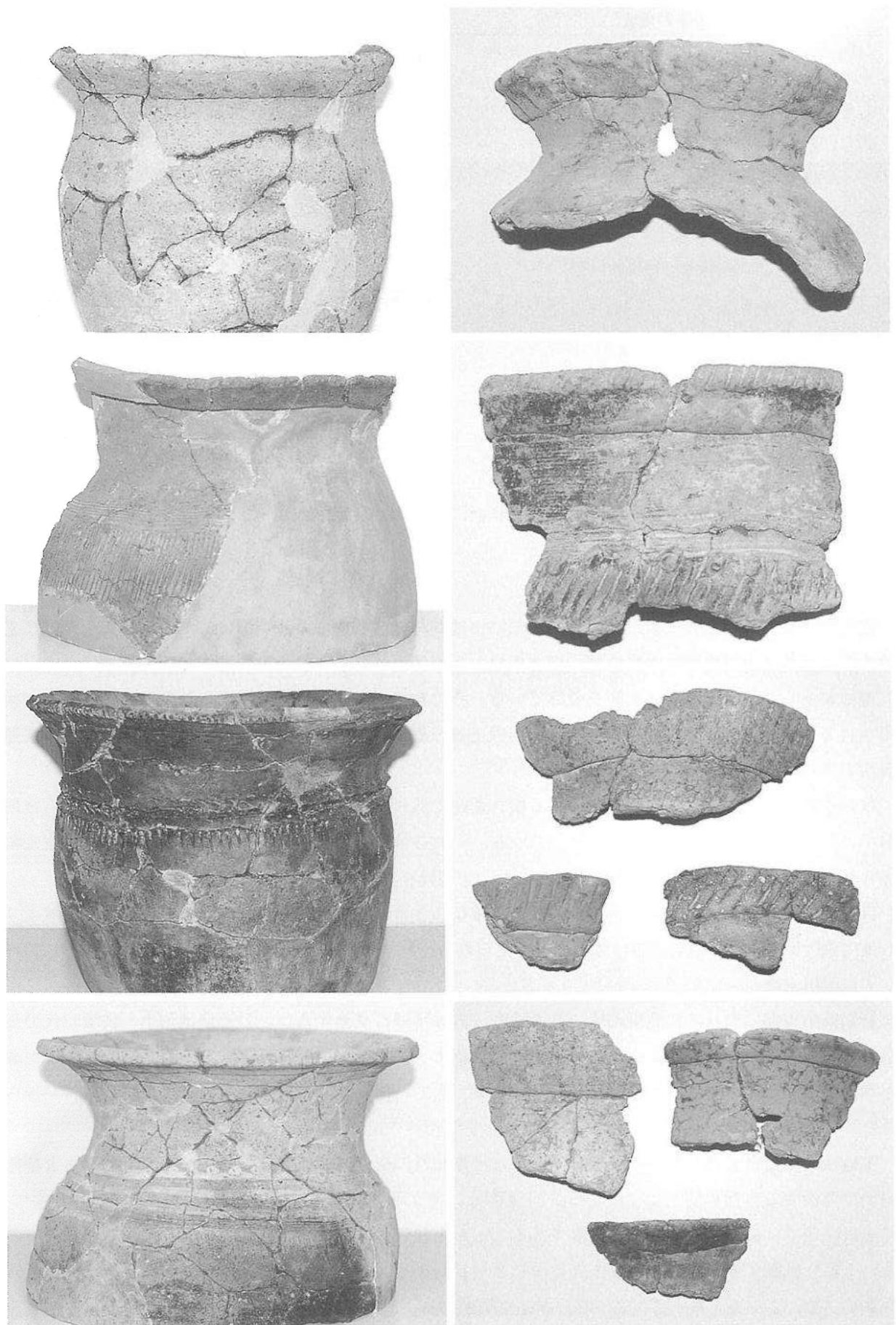


写真16 南四国における類似資料の口頸部詳細－1（具同中山遺跡群出土）

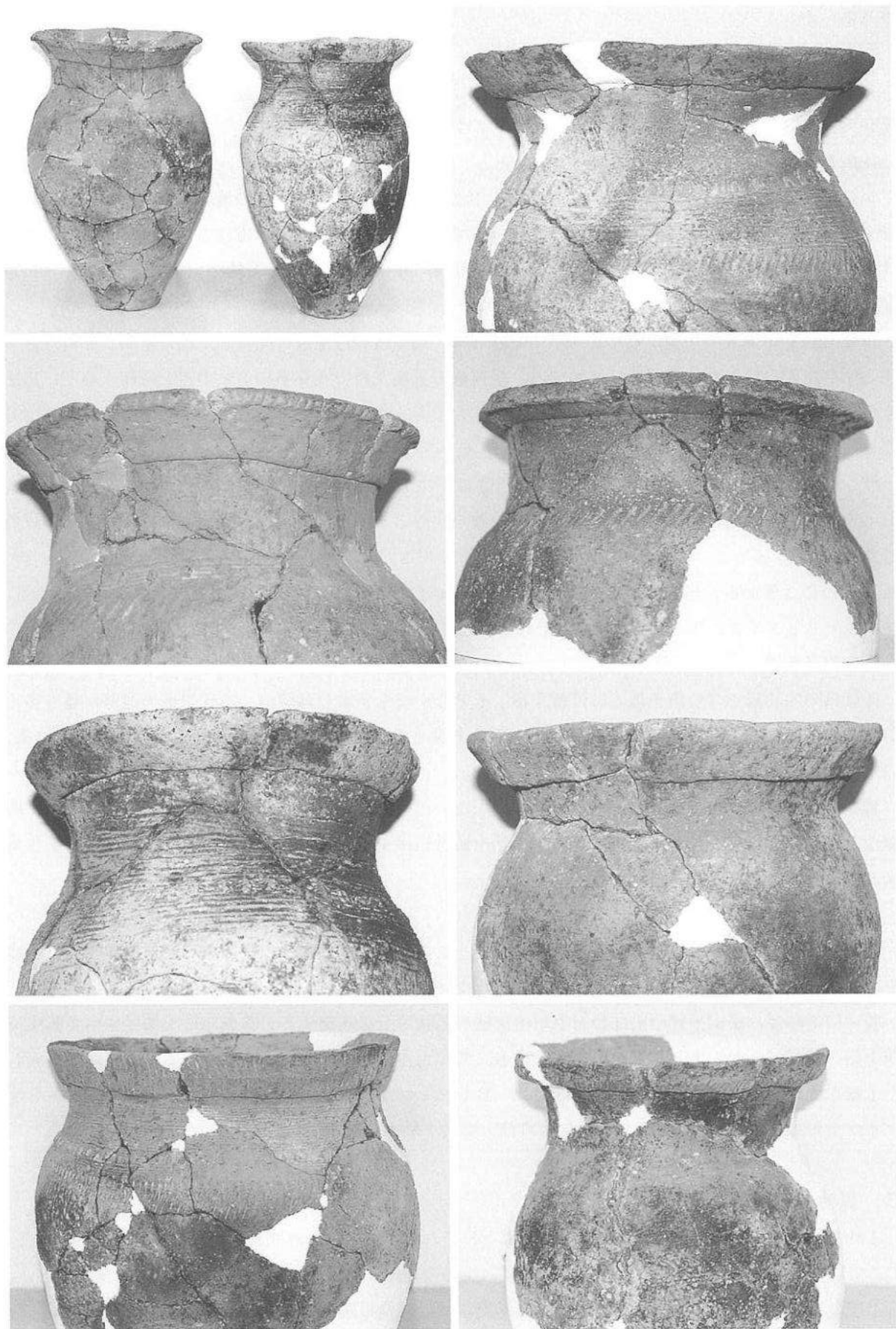


写真17 南四国における類似資料の口頸部詳細－2（北高田遺跡出土）

ブもあった。

八田神母谷遺跡と天神遺跡から出土した土器は小片であり、明確なことはいえない。

以上のこと等から、当地域出土の瓜生堂近似例は全体の50%の割合を占める。他に3-B bタイプが全体の19%で、1-A bタイプ、2-A aタイプはそれぞれ13%に満たない。

⑤四万十川流域以南

高知県南西部を流れる四万十川の支流である中筋川流域に立地する。この地域は縄文時代から近世におよぶ多くの遺跡が確認されている。ここに位置する中村市から土佐清水市にいたる地域を対象に類似土器の集成をおこなった。その結果、具同中山遺跡群（中山市）、サンナミ遺跡（宿毛市）、ムクリ山遺跡（大月町）から関連資料が得られた。

本地域内で類似資料が多かった具同中山遺跡群は、高知県の西南端に位置し、四万十川とその支流である中筋川が形成した沖積平野に立地する。当遺跡の集成資料で残存率のよい土器を概観すると、瓜生堂個体Aと同じ2-B bタイプは全体の56%の割合であった。他に1-B bタイプや2-B aタイプ等がある。

サンナミ遺跡とムクリ山遺跡から出土した土器は小片がほとんどで、明確なことはいえない。しかし、B bタイプの粘土貼付口縁をもち、胎土に粗粒砂を含むことから瓜生堂例と同一系統の土器である可能性が高い。

以上のこと等から、当地域出土の瓜生堂近似例は、仁淀川流域と同じく全体の50%の割合を占める。他に1-B bタイプ、2-B aタイプがそれぞれ20%の割合である。

⑥宇和島地域

愛媛県の宇和島を含む南予地方に位置する。そのなかでも宇和島地域は、古代以前の遺跡が最も多く分布する一帯である。ここに位置する東宇和郡を対象として類似土器の集成をおこなった。その結果、岩木赤坂遺跡から関連資料が得られた。

岩木赤坂遺跡は、南予地方の宇和盆地に位置する。当遺跡から出土した土器は小片がほとんどで、明確なことはいえない。しかし、B bタイプの粘土貼付口縁をもち、胎土に粗粒砂を含むことから瓜生堂例と同一系統の土器である可能性が高い。

⑦松山平野地域

愛媛県松山市を中心とする中予地方に立地する。ここに位置する松山市を対象として類似土器の集成をおこなった。その結果、釜ノ口遺跡から関連資料が得られた。

釜ノ口遺跡は、松山平野中央部の石手川中流域の扇状地上に立地する。集成した土器はすべて弥生後期中葉の溝S D 3からまとまって出土している。共伴土器には豊後系土器がみられる。当遺跡の集成した土器を概観すると、瓜生堂個体Aと同じ2-B bタイプは全体の83%の割合であった。他に2-B aタイプがある。なお、この地域での類例資料は、搬入土器等として考えられるものにあたる。

3. 瓜生堂遺跡例の位置づけ

これまで南四国地方における類似資料の集成と、それらが出土した地域および遺跡の概要をみてきた。ここではその結果をふまえて、瓜生堂“土佐産”土器の詳細な搬出地域とその時期について検討したい。

上記の④仁淀川流域の北高田遺跡、⑤四万十川流域以南の具同中山遺跡群、⑦松山平野地域の釜ノ口遺跡出土の各土器は、その形態・製作技法・文様構成等、総合的な観察の結果、瓜生堂例と多くの共通

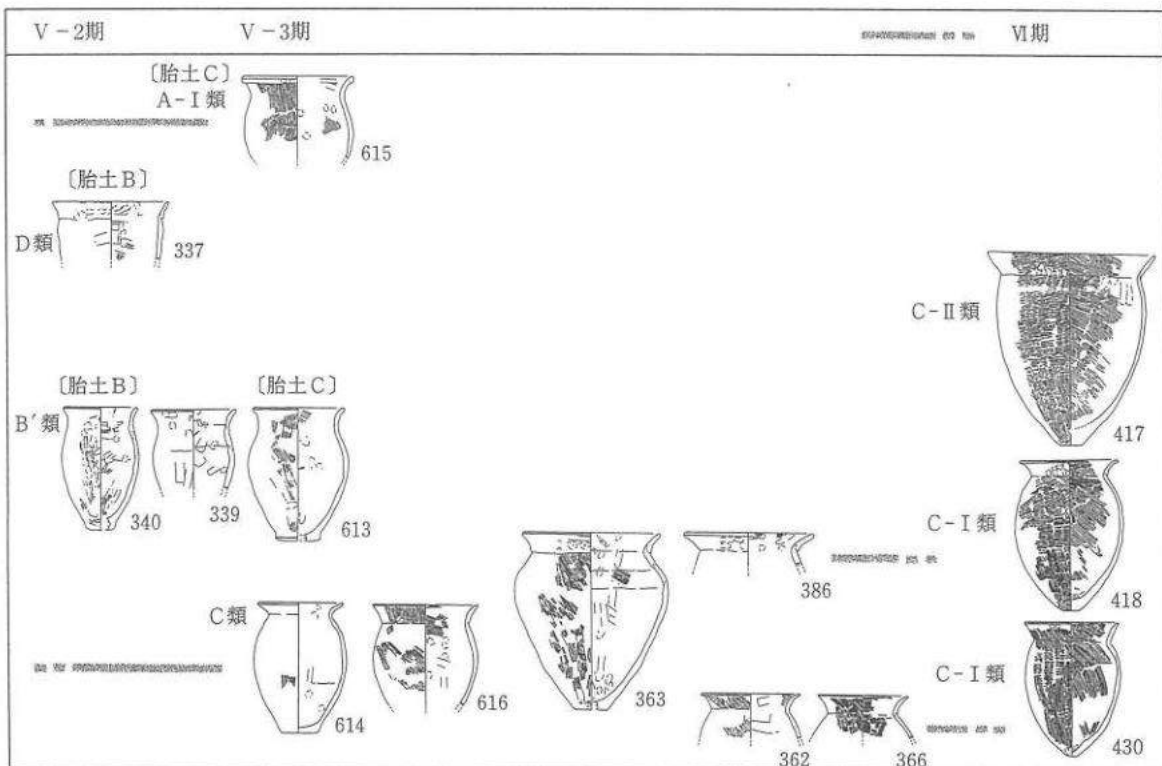
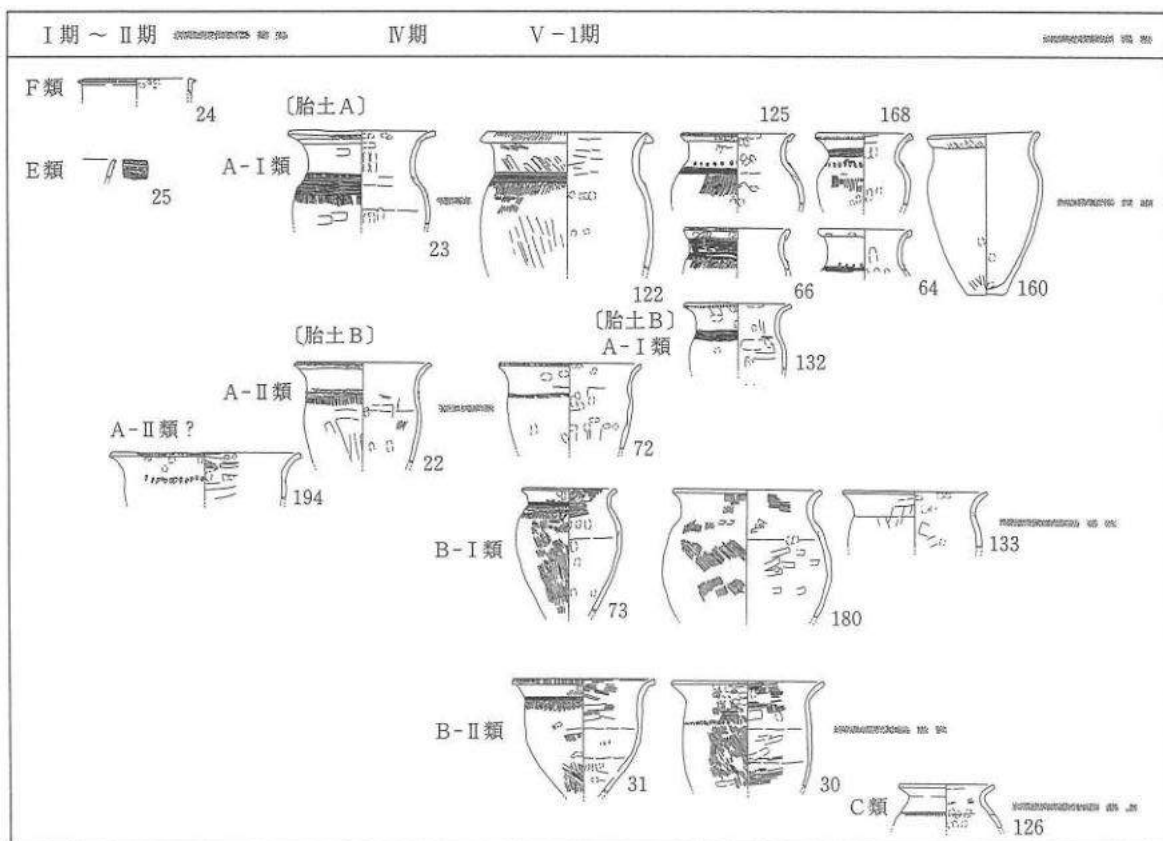
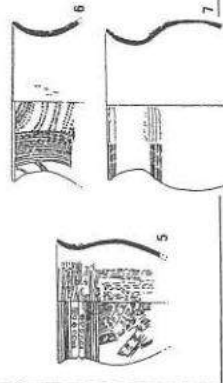
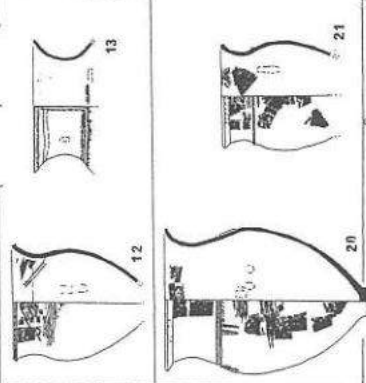
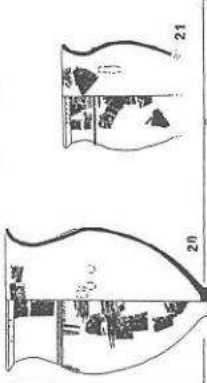
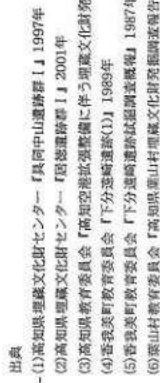


図446 具同中山遺跡における甕の形態分類・変遷図

東 部	
1・3: 具向中山道跡群Ⅱ区ⅩⅠ層(1) 2: 居徳遺跡群ⅠC区Ⅳ層(2) 4: 田村遺跡ⅠLoc.10-SK2(3) 5: 下分遺跡遺跡SK10(4) 6: 下分遺跡遺跡SK18(4) 7: 下分遺跡遺跡SD1(5) 8・9: 永野遺跡(6) 10・11: 田村遺跡ⅠLoc.36A-SD2(7) 12: 下分遺跡遺跡SD1(4) 13・15: 下分遺跡遺跡SK15(8) 14: 下分遺跡遺跡SD3(8) 16: 田村遺跡ⅠLoc.45-SD2(7) 前期末	
17~19: 田村遺跡ⅠLoc.44A-SD1(3) 20・21: 下分遺跡遺跡群Ⅱ中期遺物包含層(4) 22・23: 下分遺跡遺跡群Ⅱ中期遺物包含層(4) 24: 田村遺跡ⅠLoc.45-ST5(7) 25: 原南遺跡ST1(10) 26: 北高田遺跡SD5(11) 27・28: 北高田遺跡SK2(11) 29: 北高田遺跡SD14(11) 30: 下ノ坪遺跡SD5(12) 中期前葉	
出典 (1)高知県埋蔵文化財センター『具向中山道跡群Ⅰ』1997年 (2)高知県埋蔵文化財センター『居徳遺跡群Ⅰ』2001年 (3)高知県埋蔵文化財センター『高知空港拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第3分冊 1986年 (4)香美町教育委員会『下分遺跡遺跡(Ⅰ)』1989年 (5)香美町教育委員会『下分遺跡遺跡(Ⅱ)』1987年 (6)香美町教育委員会『高知空港拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第5分冊 1986年 (7)高知県埋蔵文化財センター『高知空港拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第5分冊 1986年 (8)香美町教育委員会『高知空港拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第5分冊 1986年 (9)松村信博『高知県』『弥生時代中期の土器と集落』古代学協会関西支部第8回大会資料1994年 (10)高知県埋蔵文化財センター『原南遺跡』1991年 (11)高知県埋蔵文化財センター『北高田遺跡』2000年 (12)香美町教育委員会『下ノ坪遺跡Ⅱ』1998年 中期中葉	
出典 (1)高知県埋蔵文化財センター『具向中山道跡群Ⅰ』1997年 (2)高知県埋蔵文化財センター『居徳遺跡群Ⅰ』2001年 (3)高知県埋蔵文化財センター『高知空港拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第3分冊 1986年 (4)香美町教育委員会『下分遺跡遺跡(Ⅰ)』1989年 (5)香美町教育委員会『下分遺跡遺跡(Ⅱ)』1987年 (6)香美町教育委員会『高知空港拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第5分冊 1986年 (7)高知県埋蔵文化財センター『高知空港拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第5分冊 1986年 (8)香美町教育委員会『高知空港拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第5分冊 1986年 (9)松村信博『高知県』『弥生時代中期の土器と集落』古代学協会関西支部第8回大会資料1994年 (10)高知県埋蔵文化財センター『原南遺跡』1991年 (11)高知県埋蔵文化財センター『北高田遺跡』2000年 (12)香美町教育委員会『下ノ坪遺跡Ⅱ』1998年 中期後葉	
後期前葉	

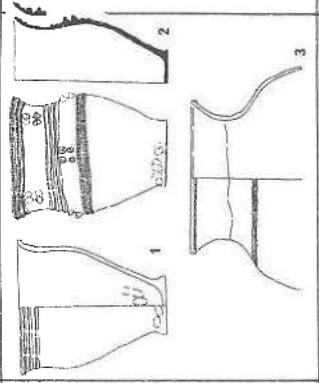
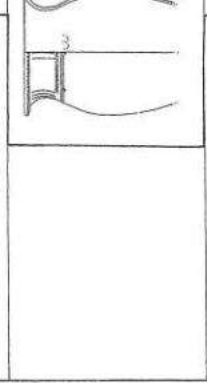
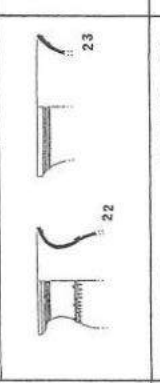
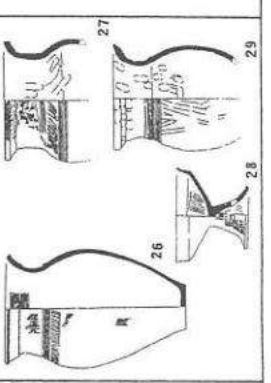
西 部		中 央 部	
1 2 3 4 前期末		5 6 7 8 9 10 11 中期前葉	
12 13 14 15 16 17 18 19 中期中葉		20 21 22 23 24 25 中期後葉	
26 27 28 29 後期前葉		出典 (1)高知県埋蔵文化財センター『具向中山道跡群Ⅰ』1997年 (2)高知県埋蔵文化財センター『居徳遺跡群Ⅰ』2001年 (3)高知県埋蔵文化財センター『高知空港拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第3分冊 1986年 (4)香美町教育委員会『下分遺跡遺跡(Ⅰ)』1989年 (5)香美町教育委員会『下分遺跡遺跡(Ⅱ)』1987年 (6)香美町教育委員会『高知空港拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第5分冊 1986年 (7)高知県埋蔵文化財センター『高知空港拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第5分冊 1986年 (8)香美町教育委員会『高知空港拡張整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 田村遺跡群』第5分冊 1986年 (9)松村信博『高知県』『弥生時代中期の土器と集落』古代学協会関西支部第8回大会資料1994年 (10)高知県埋蔵文化財センター『原南遺跡』1991年 (11)高知県埋蔵文化財センター『北高田遺跡』2000年 (12)香美町教育委員会『下ノ坪遺跡Ⅱ』1998年	

図447 「南四国型甕」の変遷図

点をもつことが明らかとなった（写真16・17参照）。このことから、これらの地域周辺である高知西部以西の地域から搬入された土器であると考えられる。ただし、本稿の対比検討では、胎土および色調に関しては十分には実施できていないので、その属性領域での比較は対象外とならざるをえない。

次に、瓜生堂例の搬入時期について、南四国地方における類似資料の編年と対応させて検討したい。ここで参考になる研究成果は、前述遺跡の一つである具同中山遺跡群の弥生～古墳時代初頭土器に関して、各時期区分の様相を整理された図446（浜田2001）である。本図では、Ⅰ期が弥生前期末、Ⅲ期が中期中葉、Ⅳ期が中期末、Ⅴ－Ⅰ期が後期前葉、Ⅴ－Ⅱ期が後期中葉、Ⅴ－Ⅲ期が後期後葉に比定されている。瓜生堂例は、具同中山遺跡群の形態分類では、甕A－Ⅰ類タイプ（張りのある胴部から一旦すばまったのち大きく外反し口縁部にいたるもの）に該当する。このタイプは、当遺跡群では弥生後期前葉まで依然として高い比率を占めている。そして、瓜生堂例に近似した土器は、Ⅴ－Ⅰ期（後期前葉）に相当する。また、出原恵三氏の「南四国型甕」の変遷整理（図447、出原2001）でも、後期前葉において類似資料がみられる。以上のことから、瓜生堂例は地元編年における弥生後期前葉に比定される土器となる。瓜生堂遺跡の発掘での相伴土器は近畿編年の弥生後期前半であり、併行関係上は整合性をもつことになり、この時期に搬入されたことは明らかである。

最後に、口縁部形態や施文状況に差異が存在する瓜生堂例2個体において、時期差の有無を考慮すべきか否かについて考えておきたい。この種の土器の粘土帯貼付口縁のあり方を概観すると、①扁平な粘土帯の外側と下端への強い指頭圧痕によって1mm以下のわずかな段をなすタイプと、②粘土帯外面に指頭圧痕を認めるが2～5mm程度の明瞭な段をなすタイプに大別分類できる。しかし、南四国において①②の両タイプは、弥生中期から後期前葉を通じてともに認められることから、同じ時期の所産と考えられている（浜田2001）。タイプ①は瓜生堂個体Aと、タイプ②は同Bに該当することから考えると、これらの瓜生堂2個体例においても、ほぼ同時期と考えるほうが自然であろう。この点に関しても、発掘調査時での同層順検出という出土状況から、両個体にあえて大きな時間差を想定できるものではない点と符合する。

4. 地元研究者によるコメント

ここで、今回の瓜生堂“土佐産”弥生後期土器に対する、地元研究者の意見を紹介しておきたい。

まず、来阪時に両個体の全容を詳細に観察された久家隆芳氏の所見は次のとおりである。形態・技法・文様構成・色調は類似するので、模倣土器というような資料ではなく搬入品でまちがいない。しかし、胎土については、高知平野で出土する当該土器と比較すると、チャートを含む点は一致するが全体の雰囲気がやや異なる。また、個体A・Bの形態・文様が同一ではないが、高知県内でもこれら両タイプの土器が相伴して検出されることから、時期差はないと考えてよい。文様について観察すると、両個体とも構成がシンプルなので、高地県西部地域の可能性は皆無に等しく、物部川流域以東の可能性が極めて高い。だが、高知平野東部の物部川流域や、高知平野西部の仁淀川地域の土器に該当するものではないと考えられる。そのような点等から、今後、これまで調査のほとんど進んでいない高知県東端部の安芸・室戸地域との関連性が期待できる可能性がある。なお、高知県内では、弥生中期～後期に河内産土器がほとんど出土しないこともあり、直接交流のあった可能性はかなり低い。

次に、筆者（秋山）が資料調査で高知県に赴いた際、持参した瓜生堂遺跡の個体A体部片と個体Bを実見していただいた2人の研究者からご意見をうかがった。坂本憲昭氏は、形態や文様からは高知県西部

のものと酷似する。しかし、胎土に関しては、この地域の土器では素質が瓜生堂例に比べてもっと“ザラザラ”といった印象がある。出原恵三氏は、形態・文様・胎土等の全体的な特徴から、仁淀川流域の北高田遺跡の製品と非常に酷似し、瓜生堂例は北高田遺跡例“そのもの”といってもよいのではないか。このようなご意見であった。

一方、瓜生堂例を実見していただく機会がなかったが、送付した実測図に基づくご検討を得た下條信行氏からは、次のようなコメントをちょうだいした。西土佐に分布するタイプであろう。しかし、田村遺跡群などの土佐中央部・高知平野にも類例が存在するので要考慮の必要がある。南予地方も類例土器の分布範囲内だが、口縁に厚い粘土帯を貼り、長条の刻目をいれるタイプは分布しない。南予地方ではこの時期の「西南四国系土器」の粘土帯は、おおむね痕跡的になっている。一方、土佐では、この時期でもしっかり粘土帯を貼っている。なお、松山市釜ノ口遺跡資料は、西土佐のもので、後期中葉におよぶものである。

以上のように、地元の弥生土器に精通されている研究者の間においても、瓜生堂例に関して必ずしも完全な意見の一致をみない。要するに、本稿で不十分ながらも検討を加えてきた内容と整合性をもつ事項が多く確認できるものの、齟齬をきたす部分もあわせてみられるわけである。ただ、逆説的にはその点において、上記してきた試考成果が決してまったくの荒唐無稽でないことだけは保証されたといえるであろう。

5. 実見資料調査における雑感

ところで筆者（秋山）は、2004年1月22日、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターにおいて、実際に関連土器類を観察する機会をもつことができた。同センターのご配慮を得て具体的にご準備いただいた資料は、高知県西部・四万十川流域の具同中山遺跡群（松田・浜田・池澤・筒井2001での報告資料）と高知県中部（高知平野西部）・仁淀川流域の北高田遺跡（出原・池澤・久家2000での報告資料）から出土した弥生後期前葉の土器群である。その際の観察所感を記しておくこととする（写真16・17参照）。

まず、具同中山遺跡群例における全体的な印象では、形態や文様が類似はするが、瓜生堂例とは“しっくりとこない”個体が多いように感じた。色調や胎土も瓜生堂に共通するような個体も散見されたが、大勢としては、灰白褐色系を呈し、胎土の素質が粗く、灰色系チャートを含むものの長石粒の方が顕著な個体が多いように見受けられた。要するに、瓜生堂例とは同じ諸特徴を備えるが、やや違和感を与える要素もあるといった雑感をもった。

一方、北高田遺跡例では、瓜生堂例の個体A・Bとまったく一致する属性を保有する個体そのものは確認できなかったが、個々の要素を取り上げるとおおむね共通項が多いと判断できた。具体的には、全体形状における微妙な器表カーブの印象や、粘土帯口縁における成形や膨らみ具合、さらにその部分のナデ等による微細な“クセ”ともいえるべき処理の仕方が、まさに“瓜二つ”ともいえる個体がいくつか存在した。灰茶褐色系の色調や胎土中におけるチャート等の含有状況も近似した印象をもった。しかも、器表面におけるやや“皮膜が貼った”ような焼成具合も、瓜生堂例に類似する特徴のように感じられた。よって、北高田遺跡例は、総体としては瓜生堂例にきわめて近い諸属性を保有し、比較的“しっくりとくる”資料と推定できた。少なくとも、北高田・瓜生堂両遺跡例は、ほぼ等しい同質規範のもとで製作された土器と推定できる、という所見をもち得た。

したがって、筆者には総合的な判断のしようがないものの、先に土器実測図等から検討した瓜生堂例

の故地推定と大略的には矛盾しない。しかも、そのなかでは、少ない実見結果の印象ではあるが、高知平野西部の仁淀川流域の土器と共通性が多く調和的と推定できたことになる。つまり、上記の地元研究者によるご意見のなかでは、出原氏の所見と近似する。ただし、筆者の雑感では2遺跡以外の土器群には直接的に接していない状態のものであるので如何ともしがたい。が、このように本稿での先の推論と実見観察の結果が相互に矛盾しない点は重要な成果といえよう。

6. 近畿の他遺跡における関連資料について

さて、今回の瓜生堂“土佐産”土器は、弥生後期例としては近畿で確認された初見なのは確実である。

しかし、弥生前期では、口縁部に粘土帯を貼り付ける特徴をもち「南四国型土器」に含めてよい資料が、近年の和歌山県御坊市堅田遺跡における調査で環濠出土品中に確認されていた(図448-1、久貝1999、同2000)。堅田遺跡の場合、近畿南部の太平洋に面した立地環境にある遺跡でもあり、外洋航路をたくみに利用した南四国との直接的交流の結果で搬入されたと想定できる。その意味において、同じ近畿地方といえども、河内地域の瓜生堂遺跡とは状況が異なっているといえるであろう。

ところが、本稿準備の資料調査段階で、粘土貼付口縁部をもち「南四国型土器」の可能性ある資料が、瓜生堂以外に次の近畿2遺跡から出土していることを、愛媛の梅木謙一氏よりご教示を得た。これらの土器について概要を紹介しておこう。

倉垣遺跡(図448-2、辻本1999)は、大阪府の北端部、摂津・丹波地域の山に囲まれた豊能郡能勢町倉垣地内に位置する。本遺跡のピットから出土した粘土貼付口縁をもつ壺は、弥生前期末の土器である。形態は、細い頸部から外方に大きく屈曲して広がる口縁部をもつ。外面調整は全体にハケメを施し、口縁端部に刻目と1条沈線、頸部と肩部に多条の沈線を加える。本例は堅田遺跡例と関連して注目できる弥生前期資料である。

寛弘寺遺跡(図448-3、橋本1995)は、大阪府の東南部、金剛・葛城山脈の西麓、千早川と宇奈田川に挟まれた南河内郡河南町大字寛弘寺地内に位置する。本遺跡の土坑群から粘土貼付口縁をもつ壺が出土している。形態は、胴部から直立する頸部をもち、そこから広がる口縁部を備える。同じ土坑群からの出土品としては、弥生後期前半の土器が報告されている。本例は、所属時期から今回の瓜生堂例に関連して注目できる資料である。

以上のように、堅田遺跡のような外洋環境の遺跡だけでなく大阪府内の遺跡において、遠隔地である土佐ないし南四国と関連をもちそうな土器が、瓜生堂遺跡以外にも存在する可能性がでてきたことにな

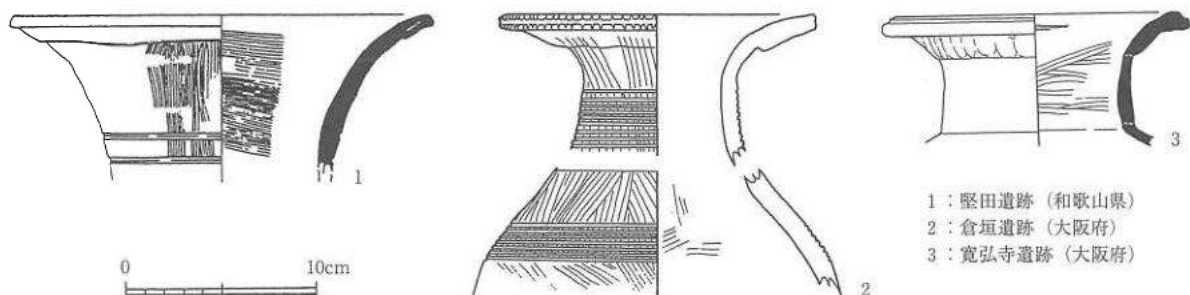


図448 近畿における“土佐産”土器関連資料

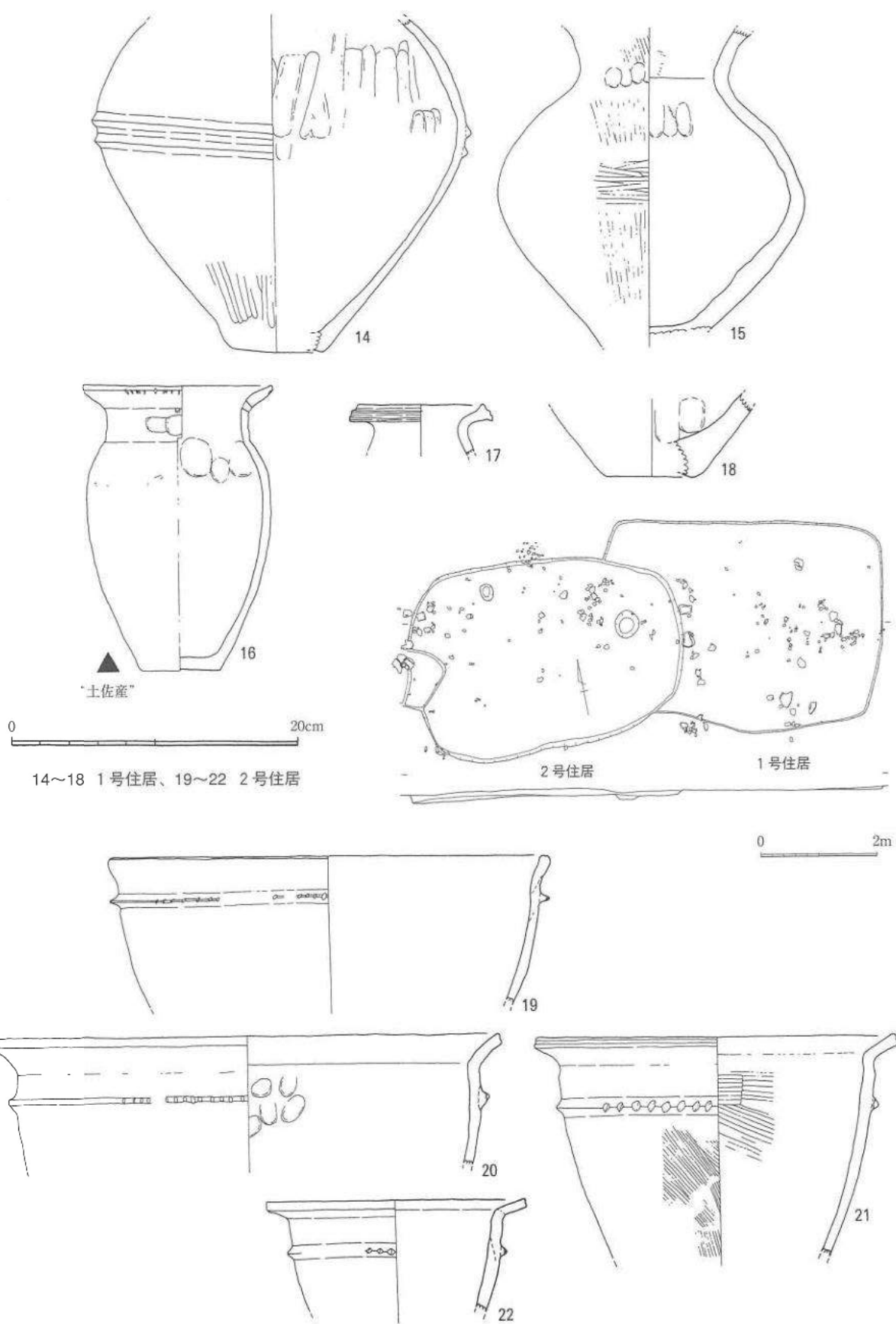


図449 宮崎県鬼付女西遺跡における“土佐産”弥生後期甕の出土状況

る。今後、意識的な資料調査を実施すれば、近畿地方にもまだ“土佐産”土器の特徴をもった個体が出土している可能性が極めて高いといえよう。

7. 結びにかえて

本稿では主として、近畿初見例となった瓜生堂“土佐産”弥生後期土器に類似する資料について、南四国を中心とした地域での集成作業とそれらとの比較検討をおこなってきた。しかし、対象領域内では発掘自体がほとんど進んでいない地域もあり、今回の状況把握においては不完全な地域も多々ある。また四国地域全域についても資料の検討集成をおこなう必要もある。今後の課題として、四国全体をも視野に入れて悉皆収集をおこない、具体的な搬入経路等も追求していきたい。

これに関して付言しておく、瓜生堂例とはほぼ同時期の“土佐産”土器の遠隔地への搬出例が、宮崎県鬼付女西遺跡で確認されている（図449、長津1989、出原2002）。これは、この遺跡の立地からみて、近畿弥生前期末の堅田遺跡と同様に、外洋交流の産物として評価するのが最も妥当であろう。上記したように、このような搬入経路・契機と、今回の瓜生堂例の場合とは同等にはあつかえないと考える。また一方で、近年の研究によって、弥生後期前半の「南四国型土器」が、四国側の瀬戸内沿岸の諸遺跡からも確認されだしているようである（出原2002、梅木2002、ほか）。そして、重要な事項として今回の瓜生堂遺跡の発掘では、これらの“土佐産”土器とともに、本章第6節で検討したように讃岐産の下川津B類土器が比較的顕著に搬入されている実態がみられる。このような四国側での近年における“土佐産”品の出土状況と瓜生堂遺跡での各種土器の搬入現象を符合さすならば、今回の瓜生堂“土佐産”弥生後期土器は、讃岐地域等の四国瀬戸内沿岸部を仲介したあり方で搬入されてきた現象として想定できる可能性がある。だが、その当否の行方は、今後の意識的な検討を待たねばならない。

〔註〕

- 1) 浜田2001の粘土貼付口縁の形態分類方法を引用した。ただし、本稿で使用したアルファベットや番号は新たにふりなおした。
- 2) 各タイプの割合（％）は、残存率のよい個体（肩部から口縁部にかけて残る土器）を対象として計算した。以下、同じ。

〔引用・参考文献〕

- 梅木謙一 2002 「松山平野における西南四国系土器の流入形態」『四国とその周辺の考古学』 犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会
- 2003 「西南四国系土器」『松山市埋蔵文化財調査年報』14 松山市教育委員会
- 江戸秀輝・坂本憲昭 1999 『福井遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 久貝 健 1999 「御坊市堅田遺跡の前期弥生集落」『弥生文化と海』（紀伊考古学研究会第2回大会） 紀伊考古学研究会
- 2000 「堅田遺跡前期環濠集落」『弥生文化の成立』（第47回埋蔵文化財研究会発表要旨集） 埋蔵文化財研究会
- 久家隆芳 1998 『八田神母谷遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 2000 「サンナミ遺跡」『神ヶ谷窯跡・サンナミ遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 2002 「南四国西半部の弥生土器」『四国とその周辺の考古学』 犬飼徹夫先生古稀記念論文集刊行会
- 高知県教育委員会 1986 『田村遺跡群』2～4（高知空港拡張整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書）
- （財）高知県文化財団埋蔵文化財センター 1996 『具同中山遺跡群Ⅱ－1』（平成7年度中村宿毛道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ）
- 坂本憲昭 1993 『野市町本村遺跡発掘調査報告書』 野市町教育委員会
- 更谷大介 2000 『下ノ坪遺跡Ⅲ』 野市町教育委員会

- 下條信行・村上恭通 1999 『岩木赤阪遺跡』 愛媛大学法文学部考古学研究室
- 辻本 武 1999 『倉垣遺跡（E区等）発掘調査概要』 大阪府教育委員会
- 出原恵三 1990 「『土佐型甕』の提唱とその意義」『遺跡』32 遺跡刊行会
- 1991 『原南遺跡発掘調査報告書』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 1994 『下分遠崎遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 2000 「土佐地域」『弥生土器の様式と編年－四国編－』 木耳社
- 2001 「土器と青銅器から見た土佐と宇和」『宇和の古代文化を解剖する』（愛媛大学考古学研究室第1回公開シンポジウム資料）愛媛大学考古学研究室・愛媛県宇和町
- 2002 「黒潮沿岸地域の交流と南四国」『田辺昭三先生古稀記念論文集』 田辺昭三先生古稀記念の会
- 2003 「『南四国型』甕の成立と背景」『続文化財学論集 第一分冊』 文化財学論集刊行会
- 出原恵三・池澤俊幸・久家隆芳 2000 『北高田遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 出原恵三・小嶋博満 2003 『東江曲遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 出原恵三・松村信博 2001 『西鴨地遺跡』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 長津宗重 1989 「鬼付女西遺跡B地区の調査」『宮崎県文化財調査報告書』32 宮崎県教育委員会
- 橋本高明 1995 『寛弘寺遺跡発掘調査概要・XIV』 大阪府教育委員会
- 浜田恵子 2001 「具同中山遺跡群Ⅳ出土の弥生時代から古墳時代初頭の土器」『具同中山遺跡群』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 廣田佳久・伊藤 強・田中涼子 2001 『天神遺跡Ⅱ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 廣田佳久・小島恵子・田中涼子 2001 『具同中山遺跡群Ⅲ－2』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 廣田佳久・田坂京子・山本純代 2002 『具同中山遺跡群Ⅲ－3』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 前田光雄 1994 「ムクリ山遺跡」『竜ヶ迫遺跡 ムクリ山遺跡』 大月町埋蔵文化財調査センター
- 松村信博・山本純代 1999 『奥谷南遺跡Ⅰ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 松田直則・伊藤 強・山崎正明・筒井三菜・久家隆芳 2000 『具同中山遺跡群Ⅱ－1』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 松田直則・浜田恵子・池澤俊幸・筒井三菜 2001 『具同中山遺跡群Ⅳ』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 森田尚宏・中山泰弘 1992 『土佐山田北部遺跡群』 土佐山田町教育委員会
- 山田和吉・堅田 至・森田尚宏・小野由香 2002 『田村遺跡群・緑の広場発掘調査報告書』（財）高知県文化財団埋蔵文化財センター
- 吉原達生・森田尚宏 1990 『稲荷前遺跡発掘調査報告書』 土佐山田町教育委員会

〔図・表・写真出典〕

図441：本報告書掲載図および新規秋山撮影分から作成、図442：新規河村作成、図443～445：各報告書ほかから新規河村作成、図446：浜田2001、図447：出原2001、図448：久貝1999、辻本1999、橋本1995から作成、図449：長津1989から作成、表33：新規河村作成、写真15～17：新規秋山撮影・作成

〔謝辞・付記〕

本編は第8回瓜生堂（近鉄）勉強会（2003年5月22日）での発表内容に基礎をおいている。当日の討議では参加者から多くのご教示をいただいた。また、関連資料の探索や当該土器の検討等では、梅木謙一、久家隆芳、坂本憲昭、下條信行、出原恵三、村上恭通、森田尚宏、（財）高知県文化財団埋蔵文化財センターの各氏・機関から多くのご援助をたまわった。末筆ながらあわせて深謝申しあげたい。なお、本稿は、両名の協議のもと河村が原稿略案を作成し、総合的な調整や除加筆、執筆等は秋山がおこなった。